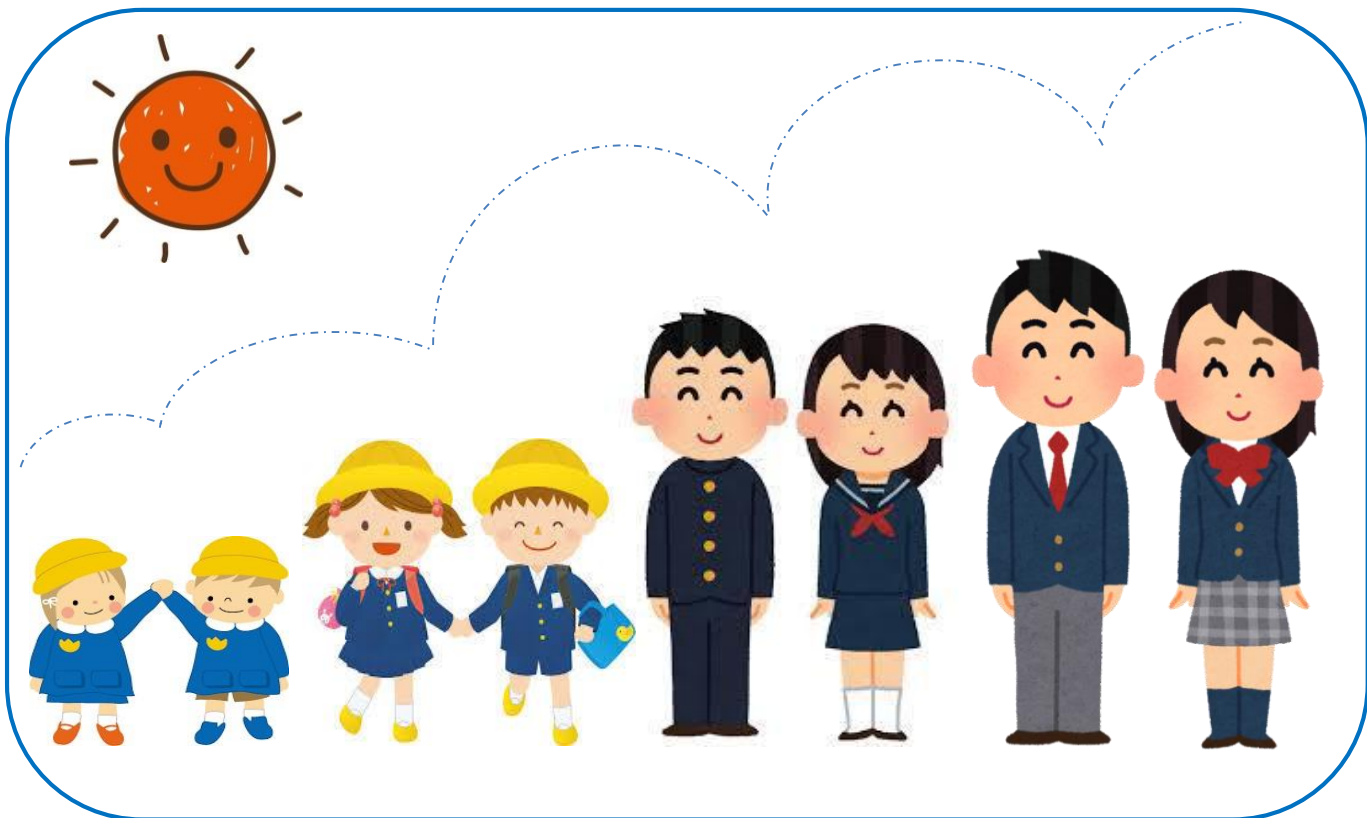


「個別の教育支援計画」と 「個別の指導計画」の活用Q&A ～幼稚園、小・中学校、高等学校の先生へ～



共生社会の実現を目指して、インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組が進められています。学習指導要領の改訂においては、全ての教職員が特別支援教育についての知識や技能を高め、組織的な対応ができるようにしていくことが求められています。また、特別支援学級及び通級指導教室に通う子どもには、「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を作成し活用することが明記されたとともに、通常の学級に在籍する特別な支援が必要な子どもにも、作成し活用に努めることが示されました。

当センターでは平成29年度の経験者研修に参加した幼稚園、小・中学校、高等学校等の教員(合計306名)を対象に、通常の学級や特別支援学級に在籍する特別な支援が必要な子どもの「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の取組状況や課題について、アンケート調査を行いました。本資料は、この結果に基づいて、「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の活用の仕方について示したものです。

本資料が幼稚園、小・中学校、高等学校の「分からない」「何とかしたい」等と感じている教員のガイドとして、また、校内研修の資料として活用されることを期待しています。そして、子どもの学びの場が変わったとしても、「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を効果的に活用することで、一人一人の学びの連続性を保障し、切れ目なく支援を行うことにつなげていただけることを願っています。



本資料を読むにあたって

1 作成の趣旨

第2期群馬県特別支援教育推進計画に示された本県公立学校における「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の作成率（平成29年度）は、下の表のようになっています。また、平成29年度、当センターで教員を対象に行ったアンケート調査において、所属する学校における各計画の作成状況がどうなっているかを尋ねたところ、以下の図のような結果となりました。この結果を見ると、「（自校の作成状況が）分からない」と回答した中学校や高等学校の教員が3割を超えていること、幼稚園や高等学校では、表の作成率に比べ、「どちらも作成していない」と回答した教員が多くいること等から、作成された各計画が、子どもに関わる教員間で共有され十分な活用までには至っていないのではないかと推測されました。

そこで、各計画の活用上の難しさや課題に答える「Q&A形式」により紙面を構成し、各学校で活用する際に役立ててほしいと願い、本資料を作成しました。本資料により他校の取組や活用にあたっての考え方を参考にして、子どもたちへの支援の継続、充実が図られることを期待しています。

表 本県公立学校における障害のある子ども等への「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」の作成率：平成29年度

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校
個別の教育支援計画	51.4%	84.7%	83.4%	31.4%
個別の指導計画	90.3%	97.1%	96.9%	70.0%

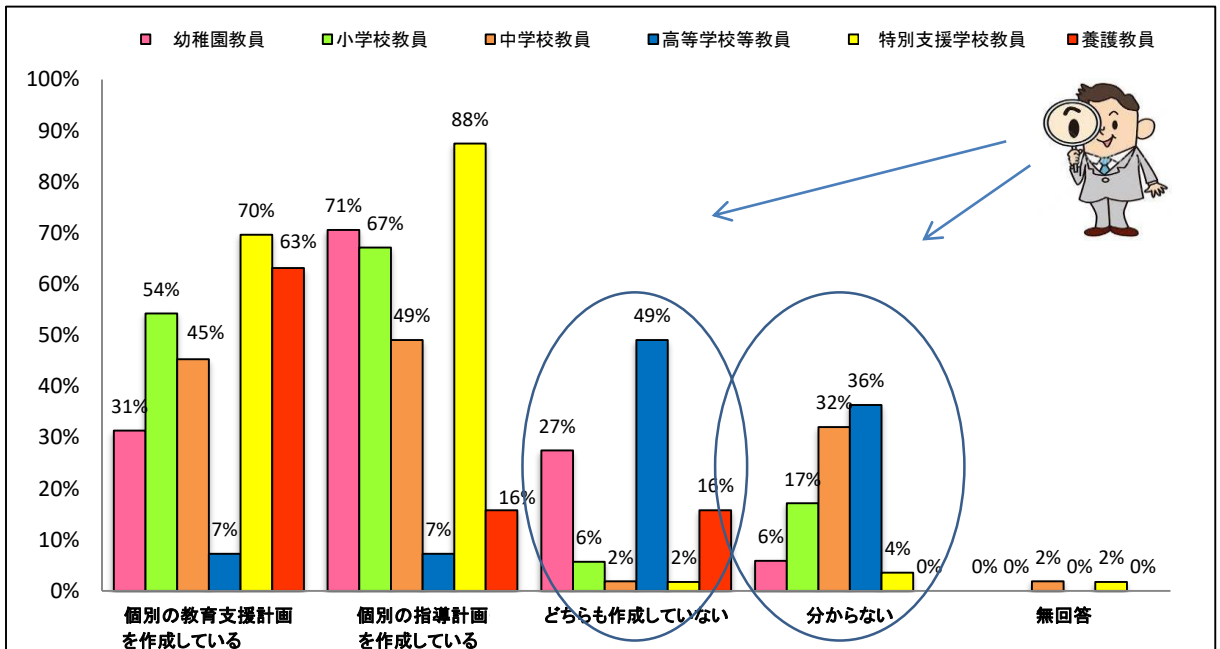


図 各計画を作成していると回答した教員の割合（当センターで実施した平成29年度アンケート結果）

*アンケートの対象者は、経験者研修と新任者研修（特別支援学級コース）を受講した幼稚園等教員51名、小学校教員70名、中学校教員53名、高等学校等教員55名、養護教員21名、特別支援学級教員56名です。

2 本資料の構成

- アンケートから見られた先生方の「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の活用上の悩みや課題についてQ&A形式で回答します。



どんな時に活用するの？

アンケートに回答した先生方の代表的な困り感を示します。



内容をより詳しく説明したり、ポイントを示したりします。



アンケートに回答した先生方の代表として、工夫している点を紹介합니다。

- チェック表や欄は、自校の取組状況の評価に活用できます。

Q1 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」をどのような場面で活用するのですか？

A 下の表に主な活用場面を示しました。
各学校園での取組状況を把握しましょう。



頑張って作成したけど、
どんな時に活用するの？

時期	活用場面 * 関係機関とは、教育、福祉、労働、医療等の機関	チェック欄	
		個別の教育支援計画	個別の指導計画
学期始め	職員全員への共通理解(引き継いだ計画を活用して)		
	保護者との作成・活用についての話し合いや合意形成(面談等)		
	関係機関との作成・活用についての検討・共通理解		
	担任と関係者(交流学級担任、通級指導教室担当教員、教科担当教員、養護教員等)との作成・活用についての話し合い		
	作成・活用についての検討会議(校内委員会、支援会議、学年会等)		
学期毎	担任と関係者(交流学級担任、通級指導教室担当教員、教科担当教員、養護教員等)での評価・改善		
	検討会議での評価・改善(学年会、校内委員会等)		
	保護者との評価・改善事項の共通理解(面談等)		
学年末	担任と関係者(交流学級担任、通級指導教室担当教員、教科担当教員、養護教員等)での評価・引継ぎ事項の確認		
	評価、引継ぎ事項の検討会議(校内委員会、学年会等)		
	保護者との評価、引継ぎ事項の共通理解(面談等)		
	関係機関との評価・引継ぎ事項の検討・確認		
	進級や進学、就労先の担当者との引継ぎ		
随時	日々の生活や学習場面での評価・改善		
	単元毎の担任と教科担当教員での評価・改善		
	保護者や進路指導担当教員との進路についての話し合い(進路面談)		
	外部の相談員やアドバイザーとのケース会議や授業参観		
	子どもの新たな困難さへの対応の検討(学年会、支援会議、校内委員会)		
	子どもの支援方法などについて外部機関との相談・連携		

「個別の教育支援計画」は、地域で生活する子ども一人一人の支援を保護者と学校及び福祉医療、労働等の関係機関が連携して効果的に支援を実施するための指標でありツール(道具)です。「個別の指導計画」は、「個別の教育支援計画」の目標や支援の方針、合理的配慮などを踏まえて作成し、学校における指導を充実させるものです。「個別の教育支援計画」が1年ないし3年間程度の長期的な計画であるのに対し「個別の指導計画」は学期毎、又は、学年毎に目標を立て、指導と評価を行う短期的な計画になります。二つの計画の目的に応じて、一人一人の支援の充実を図るため、学校全体で活用しましょう。



先生たちは、
こんな工夫をしています！

☆「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」をパソコンファイルで管理し、いつでも見られ、記入できるようにしている。(※要セキュリティ対策)



☆職員会議、相談部会で「個別の指導計画」を資料として活用している。

☆学年会の最後に特別な支援が必要な子どもについて話し合う時間を設けておき、「個別の指導計画」に示された支援や評価を毎週確認している。

☆医師との連携に「個別の教育支援計画」活用している。

Q2 どのような子どもに「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を作成・活用するのですか？

A 作成の対象となるのは以下の3つに当てはまる子どもになります。



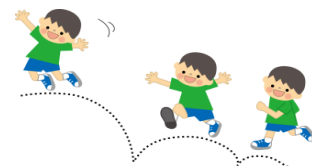
作成する子どもの基準はあるの？

- ① 特別支援学級に在籍する子ども(全員に作成)
- ② 通級指導教室に通う子ども(全員に作成)
- ③ 通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする子ども(作成・活用に努める)

③は、障害の診断があるなしにかかわらず、本人の困難さに応じて、特別な支援を必要とする子どもです。実際には、園や学校の校内委員会で検討し、作成対象となる子どもを決定します。こうすると、「担任が替わると作らなくなった」などの問題は解消し、切れ目ない支援が保障できます。

また、以前在籍していた園や学校で、特別な支援を受けていなかった子どもであっても、新たに支援が必要になったり、今まで受けていた支援とは違う支援が必要になったりすることがあります。それは、成長の過程や環境の変化により、見えにくさがあったり、困難さを表出する時期が違っていたりするからです。

下の表を参考に、各学校園段階の子どもの困難さの違い等を知り、早期に気付いて、「個別の教育支援計画」を作成・活用し、必要な関係機関とつなぎ、連携を図ることが大切です。また、園や学校内での支援体制を整え、「個別の指導計画」を作成・活用し、支援の充実を図る必要があります。



各学校園における環境等及び気になる姿と留意点

	環境等	気になる姿(例)	留意点
幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びが学びの中心である。 ・保護者と離れた集団活動が始まる。 ・お弁当や給食の時間が始まる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気になる物のところへすぐに行く。 ・順番を待つことが難しい。 ・椅子に座ると姿勢がすぐに崩れる。 ・友達のしていることに関心を示さない。 ・言葉の遅れが見られる。 ・どことなく不器用である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「他の子どもと違うな」と思っても関係機関とつながっていない場合がある。日頃から保護者と情報交換を行い、早めに対応できるようにする。 ・早期に発見・支援を行い、小学校へつなげることが重要な課題である。
小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学習集団が大きくなり、教室移動が増える。 ・机上で行う教科学習が始まる。 ・本人が周りとの違いに気付き始める。 ・高学年になると、思春期特有の心や体の変化が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一方的に話す。 ・ルールを守ることが難しい。 ・文字の視写が極端に遅い。 ・決まったパターンの文章を書く。 ・鉛筆等用具の使い方がぎこちない。 ・忘れ物が多い。 ・集中力が持続せず、周りを気にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習面の困難さが目立つようになる。発達段階や障害の特性、教科の特性に応じた支援や配慮を行う。 ・少しでもできたことや頑張った姿を褒めて自信につながるようにする。 ・プライドに配慮した、さりげない支援が大切である。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・教科担当制となる。 ・部活動が始まる。 ・一人の子どもに多くの教師が関わる。 ・自分の思いや困り感を周りに話すことが少なくなりがちである。 ・進路選択の時期である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中にノートを取ることができない。 ・自分の興味のある話を延々と話す。 ・人間関係のトラブルが増大する。 ・不登校など、二次障害が見られることがある。 ・提出物や準備物の管理が極端に苦手である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員間で情報の共有を図り、一貫した支援を行う。 ・困っていることを周りに伝えることができるよう支援する。 ・進路選択に向けての準備や情報提供、進路先への合理的配慮等の申し出等を進路指導担当教員を中心に計画的に行う。
高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・友人関係が広がる。 ・電車やバスで通学する場合がある。 ・将来の進路について漠然とした不安を感じている場合がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の関心の有無に限らず一方的に話す。 ・電車に乗り遅れる。混雑した車両に乗れない。 ・特定の科目のみ、単位を取るのが難しい。 ・周りの音が気になり、集中できない。 ・レポート等の提出物が管理できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段の様子や面談などから、学校生活を送る上での不安や悩みを把握し、必要な助言を行う。 ・進学・就職に向けての支援(自己理解の促進、職業適性の発見等の支援)を進路指導担当教員を中心に計画的に行う。

Q3 「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を活用して引継ぎを行う際のポイントを教えてください。

A 以下のポイントを参考に引継ぎを進めましょう。



引き継いだことが、生かされていないような。

ポイント1(全体編)

- 本人や保護者が持つ進級・進学先等での願いや心配なことを伝え、進級・進学先等で安心して通学できるようにする。
- 「個別の教育支援計画」を活用し、以下の内容(例)等を伝え、引き続き関係機関と一貫した支援ができるようにする。
(例)・関係機関との連携の様子 ・家庭や地域での生活の様子 ・長期的な目標についての達成状況
・有効だった支援や合理的配慮 ・今後の課題に向けての方針等
- 「個別の指導計画」を活用し、以下の内容(例)等を伝え、進級・進学先での支援がつながるようにする。
(例)・学校での生活や学習の様子 ・よさ(好きなことや得意なこと等) ・短期的な目標についての達成状況
・有効だった支援や合理的配慮 ・今後の課題に向けての方針等
- 新しい環境の中で、予測される新たな困難への支援や配慮、これまで活躍できていたこと等を伝え、進級・進学先等において安心して生活や学習が始められるようにする。



ポイント2(各引継ぎ場面編)

場面	ポイント
進級するとき	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 担任、学年の教員、時間割、学習内容(新しい教科等)、教室、友達等が変わるので、見通しが持ちやすく分かりやすい支援や配慮、教室環境の工夫などを伝える。 <input type="checkbox"/> 担任や学年が変わる毎に目標や手立て、方針が大きく変わることがないように、日頃から担任だけでなく関係者とともに評価し、次年度の目標等を関係者間で共通理解した上で引継ぐ。
幼稚園等から 小学校へ	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 座学の際の配慮について、園での様子を基に、予想される困難や支援策、落ち着いて学習できる教室環境(座席や掲示物等)等を伝える。 <input type="checkbox"/> 生活や学習環境の変化に、子どもや保護者は不安が大きくなる。安心して学校生活がスタートできるように、入学に当たっての保護者の心配事や思い等、聞き取ったことを必要に応じて伝える。
小学校から 中学校へ	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 各教科担当に確実に引き継げるように、学びにくさを感じている教科等の支援・配慮を明確にして伝える。 <input type="checkbox"/> 友達との関わりの面で必要な支援や配慮を伝える。 <input type="checkbox"/> 部活動で予測される支援や配慮事項を伝える。
中学校から 高等学校等へ	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 受検に際し必要な合理的配慮等がある場合には、担任、本人、保護者、進路担当が連携し、相手校で合理的配慮を受けながら受検できるようにする。 <input type="checkbox"/> 将来の進路についての本人の希望や悩みについて聞き取ったことを伝える。 <input type="checkbox"/> 生活面や学習面で、困り感を感じているのではないかとと思われることを伝える。
高等学校等から 進学・就労先へ	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 進学や就職に当たって試験を受ける際には、担任、本人、保護者、進路指導担当者、外部の労働機関等が連携し、相手先で合理的配慮が受けられるようにする。 <input type="checkbox"/> 進学・就労先で、適切な支援や合理的配慮を受けながら生活できるように、本人・保護者の同意の基、必要な情報を伝える。

Q4 新学期に「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を生かして、一人一人の支援の充実を図るためには何をしますか。

A 引き継いだ一人一人の「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を活用し、学校の支援体制や子どもへの支援・配慮を整えましょう。



忙しい新学期、何をするといいいのかな？

1 すべての教職員が共通理解し、チームで動き始めます。

- 管理職のリーダーシップの下、すべての教職員で特別な支援が必要な子どもを支援していくことの共通理解を図る。
- 特別支援教育コーディネーターが中心となり、引き継いだ「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」を全職員で共通理解する。
- 引き継いだ計画をもとに全職員は、関わりのある子どもを中心に生活や学習の様子を把握し、特別支援教育コーディネーターが集約する。
- 特別支援教育コーディネーターは、今年度の「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の作成スケジュールを立て、全職員に伝える。
- 特別支援教育コーディネーターは、必要に応じて特別支援教育に関わる研修会を開く。
- 管理職は、PTA総会や学校便りなどを通じて、保護者への理解啓発を行う。

2 特別な支援を必要とする子どもへの支援や配慮を実行します。

- 特別支援教育コーディネーターや担任は、入学式や始業式に向けて必要な支援や配慮を考え準備をする。
- 担任は、教室の座席、掲示物、補助具等を子どもに合わせて工夫し、教室環境を整備する。
- 特別支援教育コーディネーターや担任は、対象となる保護者に「心配なことがあればいつでも連絡してください」等と声をかけ、保護者との信頼関係づくりをしていく。
- 教科担当教員や部活動担当は、授業等における支援・配慮等を考え、担任と共通理解して行う。（「個別の指導計画」へ反映させる。）
- 養護教諭は、健康課題について、子どもの様子を確認するとともに、担任と必要な支援・配慮を検討し支援を行う。

ー特別支援教育の視点を取り入れた学級経営・授業づくりー すべての子どもが安心して生活や学習に取り組み、力を発揮できるようにしよう！

以下のように、誰にでも学びやすい環境を整えることで、個への支援・配慮がより充実します。



安心で温かい雰囲気のある学級（クラス）づくり

- ・朝の会で友達のよいところを発表する場を設ける等、一人一人の個性を大切に、共に支え合い助け合える学級づくりをします。
- ・学級（クラス）懇談会や学級便りを通じて保護者へ理解啓発を図ります。例えば、特別な支援が必要な子どもへの教材等は、困難さを軽減するために必要なものであること、みんなと違った学習方法の方が理解しやすかったり覚えやすかったりする等周りの子どもにも理解できるようにしていくことが大切です。特別な支援が必要な子どもに限らず、誰でも困っている子がいれば、手助けできる思いやりや多様性を尊重する学級を目指すなど、必要な子どもへの支援は特別ではなく、当たり前のこととして理解を促すとよいでしょう。

誰にでも分かりやすい授業づくり

特別な支援が必要な子どもに分かりやすい支援は、他の子どもにとっても有効な支援となることが多くあります。一人一人の「個別の指導計画」に示された手立てを参考にしながら、教室環境や学び方、授業の展開、板書の仕方等について、誰にでも分かりやすいように工夫します。

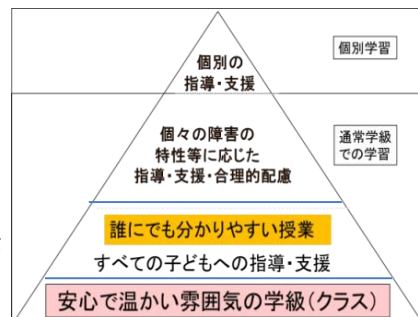


図 学級経営と授業づくりの考え方

Q5 「個別の指導計画」を日々の授業に生かすためには、どのように活用するとよいですか。

A 「個別の指導計画」の目標、支援・配慮に基づいて、各教科等の単元や1時間ごとの授業における支援や配慮等を考えましょう。



作成はしたけど(計画を見たけど)、どうやって授業につなげるの？

Bさん(小4:通常の学級・通級指導教室利用)の例

○ 個別の教育支援計画(例) * 合理的配慮の部分のみ

合理的配慮	・音や周囲の動きに敏感であるため、落ち着いて学習できるように、座席の配置を工夫する。
-------	--

○ 個別の指導計画(例)

	年間目標	支援・配慮
学習面	授業中は、他のことに気を取られずに、学習に取り組むことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・通級指導教室で使用している「私のメモ帳」に大切なことをメモするように促す。 ・分からなくなった際は静かに手を挙げるように言葉をかける。 ・集中力が持続できるように練習課題は10分程度で区切るようにする。 ・興味・関心を持ってできる学び方を提案する。(得意なこと:カードゲーム)
生活面	友達の話を最後まで聞いてから、自分の話をする事ができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・話を最後まで聞くことができた際には、褒める。 ・相手が話している途中で、話したくなった時には、「次に話していいですか」と伝えて一呼吸おく等、対応の仕方を本人と決めておく。



Bさんの国語の授業ではどのように支援や配慮をしたら、いいのかな？

合理的配慮

教師の話を集中して聞くことができるように、座席を前方に配置しようかな。事前に本人に確認して決めよう。



生活面の目標に対して

相手が話している途中で、話し始める児童はほかにもいるなあ。話し合いのルールとして「相手の意見を最後まで聞いてから、自分の意見を話すこと」を板書し、事前に全員で確認しよう。個別にも支援したり、褒めたりできるように机間指導しよう。

学習面の目標に対して

・音読や漢字の練習は10分以内でできるように、課題を分割して提示しよう。
 ・通級指導教室で使用している「私のメモ帳」に、宿題や準備物をメモするように提案してみよう。
 ・「個別の指導計画」に得意なこととして、「カードゲーム」と示されていたな。単元後半の新出漢字の復習で「部首カード合わせ」を取り入れてみよう。

<参考>

「各教科等における学習上の困難さに応じた指導の工夫の例～小学校・中学校 新学習指導要領[解説]から～」(当センター平成30年発行)には、各教科ごとの支援や配慮の工夫が示されています。

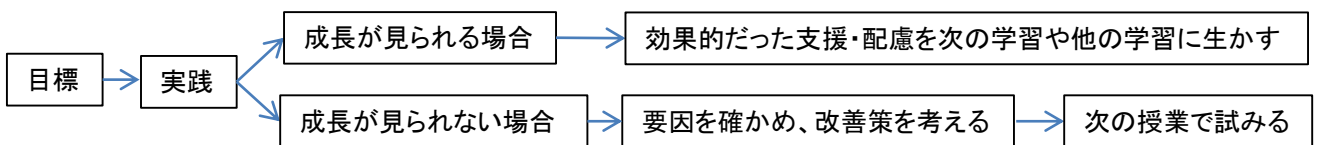


よし！実際の授業でやってみるぞ！

本人のプライドに配慮した、さりげない支援も大切です。



□ 単元や授業の評価を行い、「個別の指導計画」の短期目標に向かって授業改善しましょう。



* 成長が見られない要因(例) 目標が高(低)すぎる。学習環境の設定、支援や配慮が適切でなかった。等



先生たちは、こんな工夫をしています！

☆週案や指導案、教科の指導計画に個別の支援をメモしておき、いつでも見られるようにしている。

☆計画訪問等の際に、外部の相談員や管理職に「個別の指導計画」と共に授業を参観してもらい、助言をいただいている。



Q6 保護者との連携が難しいと感じる場面があります。どのように解決するといいですか？

A 日頃から、保護者の話に耳を傾けて、気持ちを受け止める姿勢をとることが大切です。以下は、アンケートの記述欄に見られた「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成や活用における保護者との連携上の悩みと対応例です。参考にしてください。



1 保護者の関心があまりなく、話を聞いてくれないように思います。

保護者は小さな頃から周りの人に課題を言われることが多く、目を背けたくなる気持ちになっていることもあります。乳幼児期には子どもの様子が他の子どもと違うと思いつつもどこが違うのか見いだせないまま、又は、認めることができずに、いつか他の子どもと同じように成長するだろうと願いつつも月日経っていることがあります。また、家庭環境においても、仕事をしていたり、他の兄弟の面倒があつたりと様々で複雑な場合があります。日頃からのちょっとした会話や連絡ノートを通して、子どもへの思いや悩みを聞き取り、話しやすい関係をつくるのが大切です。学校からは、子どもの良いところや「こうやったら上手かった」ということを伝え、共有するようにします。「これなら家庭でもできる」「やってみたい」と感じる支援を紹介することで学校や担任との連携が図れることがあります。

2 保護者の考えと学校の考えが異なっています。

保護者の考えがどのような子どもの姿からきているのか、保護者の話に耳を傾け、家庭での様子を十分に聞きます。学校と家庭では環境が違うので、子どもの姿が違うのは当たり前のことです。園や学校での様子を参観してもらいましょう。しかしながら、お遊戯会、文化祭の行事等、環境が異なると子どもは、いつもと違う様子を見せることがあります。日常生活の様子を参観できると良いでしょう。

3 外部機関を紹介したいが、納得してくれるか心配です。

外部の専門家とつながる目的は、子どもの特性を正しく理解して、適切な支援を考えていくことです。各外部機関において利用できる支援や相談内容について、各機関が発行している資料等で事前に確認し、正確な内容を保護者に伝えます。特に医療機関の受診に抵抗を感じている保護者に対しては、まずは保護者の気持ちに寄り添い、考えを共有することが大切です。必要性を感じていない保護者に繰り返し勧めることは控える等の配慮も必要です。特別な支援が必要な子どもへの支援は、障害の診断があるなしに関わらず行います。また、診断後における支援を考えた上で勧める必要があります。例えば、障害があると診断された場合、保護者の気持ちの整理や受容、障害の特性の説明や具体的な支援の方法等の提示をしていく等の支援が考えられます。

4 「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成や引継ぎの際に、保護者の同意を得ることが難しいと感じます。

一番困っているのは子ども自身であることや支援の目的は子どもの困難さの軽減であること等を伝え、信頼関係を築いていきます。望まない理由や不安に思うことを時間をかけて十分に聞きます。「子どもの抱える困難さや今後のことについて、共に考え、可能性や力を伸ばしていきましょう」というように、必要な支援・配慮を保護者とともに考えていくといった視点で話し合いをしていくことが大切です。

「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成や活用においては、本人や保護者の願いや思いを十分に聞き、共通理解して反映させることが大切です。一貫した支援の基に、子どもは力を発揮し充実した生活を送ることができるからです。



先生たちは、
こんな工夫をしています！

☆保護者と面談や家庭訪問で、「個別の指導計画」の目標や手立てを話し合って計画を立てている。



☆学年始めに保護者に子どもの様子や身に付けたい力について、アンケートをとり、「個別の指導計画」を作成している。

☆保護者にプロフィールカードを記入してもらい、「個別の指導計画」を連携して作成している。

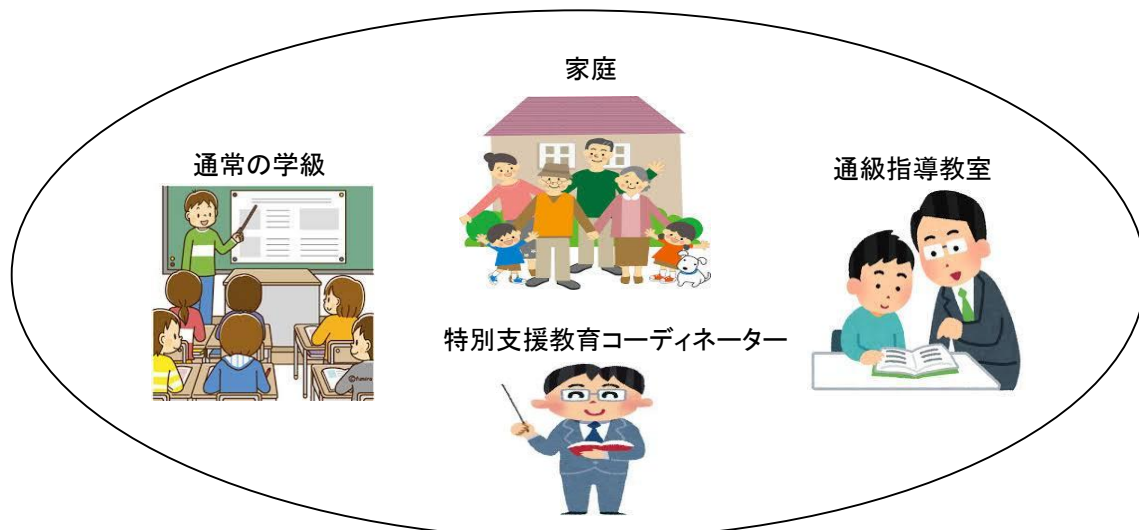
Q7 通級における指導を受けている子どもの担任です。「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成と活用についての留意点を教えてください。

A 通常の学級においては、「個別の教育支援計画」に関係機関の一つとして通級指導教室を位置付けて示します。そして、子どもが通級指導教室で上手くいっていることを生かしたり、頑張っているところを更に伸ばしたりできるように「個別の指導計画」の目標や手立てを考え作成します。「個別の指導計画」を活用して、通常の学級と通級指導教室との支援の整合性・統一性を確保し、通級指導教室での成果を通常の授業で生かすことが求められています。通級指導教室で学習した成果が現れ、個別の支援や配慮を受けつつ、通常の学級でより安定した生活や学習ができるようになることを目指します。

以下のことに留意して、作成や活用をしていきましょう。



- 1 「個別の指導計画」の作成に当たっては、通級指導教室担当教員、特別支援教育コーディネーターとともに、通級による指導における「個別の指導計画」との支援のつながり確かめながら作成します。通級で学習したことをどのように通常の学級での学習や生活、学級経営に生かしていくか話し合います。その際に、保護者や本人の願いや希望、家庭での状況を十分に聞き取り反映させることが大切です。
- 2 「個別の指導計画」の作成、実施、評価、改善する際は、特別支援教育コーディネーターが中心となって通級指導教室担当教員と日程の調整を行います。他校やサテライト学習室で通級による指導を受けている場合があります。年度の始めに日程を計画的に設定します。顔をつき合わせての検討が難しい場合には、連絡ノートを活用する等して、連携が途切れないよう工夫します。
- 3 互いの授業を参観する時間を設定することで学習の様子理解が深まります。参観が難しい場合は、ビデオ撮影し、夏休みや冬休み等に関係者で見る機会を設ける等の工夫もあります。保護者と一緒に参観できると、保護者の意見を聞くことができ「個別の指導計画」の評価や改善に反映させることができます。
- 4 通級による指導では、自分に合った学び方や上手いいかない状況での対処の仕方等を身に付けています。学びやすい教材・教具やプリントの工夫、自信や意欲を高める言葉かけなど通常の学級でも活用できるものがたくさんあります。通常の学級でも共有し、支援の成果を高めていきます。
- 5 「個別の指導計画」を活用し、通常の学級の担任、通級指導教室担当教員、保護者の3者が上手く連携することで、子どもは安心して学校生活を送ることができ指導の効果も高まります。例えば、共通の連絡ノートを活用するなどして、それぞれの場所での様子について、情報を交換できるようにしていきます。



Q8 「個別の指導計画」を活用し、特別支援学級と交流学級での交流及び共同学習を効果的に行うにはどうするとよいですか。

A 「個別の指導計画」を活用し、事前に、関係する教職員（双方の担任、支援員等）が目標、支援、合理的配慮について、共通理解します。そして、適切な支援や合理的配慮を行えるよう、授業の計画や準備を行っていきます。当日及び実施後には、「個別の指導計画」に示された目標に対しての評価を双方の担任で行います。成果や課題をまとめ、次の学習に生かしていきます。



どのように連携するといいのかな。

同じ社会に生きる人間として、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きることの大切さを学ぶ交流及び共同学習は、双方の子どもの成長につながります。このことを踏まえた上で、以下のポイントを参考に、双方の担任が連携に努め、交流及び共同学習を計画的に進めていきましょう。



すべての子どもの成長につながる交流及び共同学習の実際 10 のポイント

□ 1 特別支援学級の子どもが交流学級でも所属意識が持てるようにしている。

「個別の指導計画」に示された実態等を参考にします。
交流学級の子どもにとっても、学級の友達の一人として自然に受け入れるための学習になります。
＜例＞・机、椅子、ロッカー等を交流学級にも用意する。・お便り等の配布や係りの仕事は、交流学級で行う。

□ 2 双方の子どもが互いのことを理解できるようにしている。

「個別の指導計画」に示された実態や「個別の教育支援計画」に示された合理的配慮を参考にします。
＜例＞・自己紹介カードを交換し合う。・障害や合理的配慮について、正しく理解できるよう説明する。

□ 3 双方の子どもの目標を明確にして学習を行っている。

交流及び共同学習の年間指導計画及び「個別の指導計画」の目標を参考にします。
＜例(国語)＞(交流学級の子ども) ・「新聞づくり」を通して、伝える相手によって表現の仕方を工夫できる。
・相手を思いやって、仲間とかがわることができる。
(特別支援学級Cさん) ・「新聞づくり」を通して、助詞「は」「が」を使い分けられることができる。
・自分の気持ちを選択肢の中から選んで、友達に話すことができる。

□ 4 特別支援学級の子どもに適切な合理的配慮を提供している。

「個別の教育支援計画」に示された合理的配慮を参考にします。
＜例(国語)＞原稿を書く際は文字の大きさや書く場所が分かるよう、マス目付きシートを使用して書くようにする。

□ 5 双方の子どもが主体的に取り組める活動や支援を工夫している。

＜例＞・活動の流れや使う道具の場所を決めておく。・自分に合ったやり方を選べるように、選択肢を用意しておく。
・分かりやすい提示の仕方や環境設定を工夫する。

□ 6 双方の子どもがかかわり合いながら、学びを追求したり深めたりできるような工夫をしている。

＜例(国語)＞他の班の作成した新聞を見合う時間を設定し、良いところを次に取り入れることができるようにする。

□ 7 特別支援学級の子どもが自己肯定感を持てるような活躍の場を用意している。

「個別の指導計画」に示された実態を参考にします。
＜例(国語)＞時計が好きなことを生かして、新聞を見合う時間を知らせるなどのタイムキーパーを任せる。

□ 8 双方の担当教員が役割分担や支援の方法を共通理解して行っている。

＜例＞T1は、友達同士の良いかかわりの姿を称賛する。T2は、友達とのかかわり方の手本を示す。

□ 9 双方の子どもが関心を高めたり、「またやりたい」と思えるような振り返りを工夫している。

＜例＞・協力して新聞づくりをしている様子を写真で掲示する。・一緒に学んだ感想を作文や絵に表す機会を設ける。

□ 10 双方の子どもの目標に対しての評価を行っている。

特別支援学級の子どもは、「個別の指導計画」の評価欄にまとめます。

Q9 教科指導担当、学年主任、部活動担当など、特別な支援が必要な子どもと関わりのある教員です。「個別の指導計画」を生かして、担任とどのように連携を図るとよいですか。

「個別の指導計画」を見たけど、どのように連携していくの？



ケース会議（支援会議）って、大変そう！

- A** 「個別の指導計画」を活用して、日々の生活や学習の場面において、目標達成に向けた実践、評価、改善を関係者間で行っていきます。
- 「個別の指導計画」に示されたよさを参考に、いいところを見つけて褒め、担任に伝える。
子どもは担任以外の先生から褒められると嬉しいものです。担任から保護者に伝えることもできます。
 - 「個別の指導計画」に示された本人の困り感や学びにくさを参考に、ちょっと気になる姿が見られたら、担任に伝える。
子どもの身になって見ていくことが大切です。担任が気付かない新たな困難さに気付くことがあります。
 - 「個別の指導計画」の目標に対して、日々の成長した姿を見取り、担任に伝える。
担任が授業を参観し、一緒に成長を確かめる機会を設けることも大切です。
 - 異なる教科における学習時の様子を共有し、「個別の指導計画」の目標に向けての指導に生かす。
他の場面での様子を知ることで、指導のヒントを得ることができます。他の場面で見られた子どもの得意なことや好きなことなどのよさを指導に取り入れると、子どもは主体的に学んだり、自信を持ってできたりします。

子どもの気になる姿や対応が必要な事例がでてきた場合には・・・

以下の①～④の場合は、関係者が集まりケース会議等を持つことが有効です。早期発見しチームで対応していくことにより子どもの困り感が大きくならず、二次障害の防止にもなる場合が多いです。会議では子どもの支援だけでなく、主とする支援者である担任や学年担当等を支援する気持ちで参加するとよいでしょう。

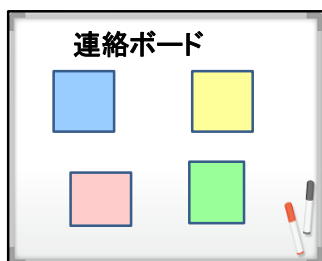
- ①学級（クラス）内での支援や対応が必要な場合
- ②学年の職員間で支援体制を組む必要がある場合
- ③関係する職員間での支援体制を組む必要がある場合
- ④学校全体で支援体制を組む必要がある場合

ケース会議の流れ(例)

- 1 状況説明
- 2 質疑応答
- 3 検討
- 4 明日から行う支援の確認と役割分担
- 5 次回評価する日の決定



先生たちは、
こんな工夫をしています！



☆共通の連絡ボードに授業の様子や気になること等を書いた紙を貼っておき、朝の打合わせの際に確認します。



伝言メモ(例)

○月○日 教科()

・Aさんの様子

・Bさんの様子

担当(☆☆)より

☆小さな伝言メモを用意しておき、授業の様子を書いて手渡します。



Q10 「個別の指導計画」を作成する際のポイントは何ですか。

A 下のチェック表に、作成のポイントを示しています。
作成時にチェックして、一人一人の子どもに合わせて計画を立てましょう。
3回分のチェック欄を活用し、学期毎など、定期的にチェックすることができます。PDCAサイクルで活用することで支援の充実を図りましょう。

作成の仕方が分からない



作成したけど、これでいいのかな？

<「個別の指導計画」を作成する際の16のポイント チェック表>

	主なポイント	1	2	3
実態把握	子どものよさ(好きなこと、得意なこと、興味・関心)を把握している。			
	生活や学習上の困難さ(学びにくさ)の要因を把握している。			
	本人と保護者の願いや悩みを把握している。			
目標	長期目標(個別の教育支援計画)→短期目標(個別の指導計画の目標)→学期や単元毎の目標のように系統性がある。			
	目標が肯定的になっている。(×～しない→○～できる)			
	示された期間内に達成可能な目標になっている。			
	具体的に基準や条件を示している。 * 基準→何分、何回、何割 等 * 条件→どんなときに、どんな支援があれば 等)			
	子ども自身が目標を理解して、主体的に取り組める目標である。			
手立て	「いつ」「誰が」「どのような場面で」「どのような方法で」支援をするのが明確である。			
	合理的配慮を示している。			
	誰にでも(支援者が変わっても)できる支援になっている。			
	子ども自身が自分で考えて気付けるような支援になっている。			
評価	目標に対応した評価になっている。			
	どのように子どもが変容したか(学習の評価)を示している。			
	どのような手立てが有効であったか(教師の評価)を示している。			
	評価を受けて今後の方針(目標、手立ての改善点)を示している。			

最初からすべて完璧に記入しようとするのではなく、今できる限りの情報の中で実態を把握し、保護者を含め関係者と連携を図りながら進めていくことが大切です。その過程で内容の変更や調整をしていけばよいのです。



先生たちは、
こんな工夫をしています！

☆外部の相談員や言語聴覚士等を園に招き、子どもの様子を参観していただき、「個別の指導計画」の作成にあたり助言をいただいている。

☆「個別の指導計画」は、各教科ごとの記入欄に各教科担当が記入している。

